



千曲川流域に広がるワインぶどう畑

世界で認められている 長野県産ワイン

長野県は「海なし県」と言われるが、海がないことをマイナスと捉えるより、山があることをプラスと考えて、「山あり県」と呼ぶべきだ、という人がある。

長野県は四周を山に囲まれ、それも中部山岳、妙高戸隠連山、上信越高原、南アルプス……と連なる国立公園の懐に抱かれて、どこに住んでも美しい山の稜線を望むことができる稀有な県である。山の緑が受け止めた水は大地を潤し、豊かな流れとなって川筋に谷を穿つ。私が「ワインバレー」という言葉を使うようになったのは、そんな長野県の地形をイメージ

してのことである。千曲川、犀川（梓川／奈良井川）、天竜川。それぞれの川が形成するバレー（谷間）に沿って個性的なワイナリーが点在する、「山あり県」ならではのワイン産地。長野県の各地に小規模ワイナリーを集積させ、新しいワイン農業で地域経済を活性化させようという信州ワインバレー構想は、山と川が織りなす長野県独特の風景から発想された。

信州ワインバレー構想は二〇二三（平成三五）年に発表され、同年に信州ワインバレー構想推進協議会が発足した。構想を策定するにあたっては、前年の二〇二二年八月に「信州ワインブランド化推進協議会」が設けられ、各分野の関係者を集めて構想の方向性を議論した。

実は、この年二〇二二年の三月に、信州ジビエ研究会が設立されている。いま振り返ってみると、長野県のジビエとワインに関する取り組みは、二〇一〇年に誕生した阿部知事のもとで、ほぼ同時にスタートしたことになる。

ワインバレー構想のほうは、ワイナリー数の増加、ワインぶどう生産量の拡大など、当初に掲げた目標を着実にクリアして、いまや長野県は、全国でも有数の高品質ワインの生産地として定評を得るまでになった。

構想策定当時（二〇一三年）と比較すると、現在のワイナリー数はほぼ三倍に近づき、ワインぶどうの生産量は二倍近くにまで増えている。品質も、国内外のコンクールやサミットにお



特集 「信州のジビエ」

野生鳥獣による農業などへの被害は、深刻な社会問題となっています。近年、鳥獣による被害解決策として、捕獲された鳥獣（主にシカやイノシシ）を「ジビエ」として食べることで有効活用しようという動きが各地で見られます。信州では、昔から多くの動植物を自然の恵みとして享受し、豊かな食文化を築いてきました。本号ではそうした食文化の一つとして、現代の生活に適合した「ジビエ」の普及を目指し、持続可能な社会づくりに携わる人びとに着目します。

信州のジビエとワイン

「山あり県」を 「美食の国」へ

玉村 豊男